

November 9, 2025

## 癒やしの神 イザヤ 61:1-2

61:1 神である主の靈がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、心の傷ついた者を癒やすため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、

61:2 主の恵みの年、われらの神の復讐の日を告げ、すべての嘆き悲しむ者を慰めるために。

きょうの箇所は、ルカの福音書4章に引用されています。イエスはご自分が育ったナザレの町の会堂で、この箇所、イザヤ 61:1-2 を朗読なさったあと、「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。」（ルカ 4:21）と言われました。イエスは、「イザヤが書いた主の靈に満たされた人とはわたしのことである。わたしが罪と死に縛られている人々を解き放ち、真理が見えなくなっている人の目を開き、心とからだの病気を癒やし、あらゆる虐げから自由にする。主の恵みが支配する新しい時代が今、始まった」と宣言されたのです。ところが、ナザレの人々は、イエスを町から追い出していました。それでイエスはカペナウムの町に移り、そこで人々を教え、聖書の預言のとおり、人々を癒やされました。

### 一、癒やしとあわれみ

イエスは「癒やし主」、「癒やしの神」です。そして、その癒やしは、イエスの愛とあわれみから生まれたものでした。カペナウムの町で、イエスはシモン・ペテロの姑を癒やされました。ルカ 4:39 に「イエスがその枕元に立って熱を叱りつけられると、熱がひいた。彼女はすぐに立ち上がって彼らをもてなし

始めた」とあるように、そのとき、イエスはペテロの姑を苦しめていた高熱を「叱りつけ」ました。人を苦しめるものに対するイエスの厳しい対決姿勢は、イエスが、病気で苦み、つらい思いをしている者をどんなに心にかけておられるか教えていきます。このイエスの愛とあわれみは、今も変わることがなく、イエスは病気で苦しむ者に心を寄せてくださるお方です。

ルカ4:40には「日が沈むと、様々な病で弱っている者をかかえている人たちがみな、病人たちをみもとに連れて來た。イエスは一人ひとりに手を置いて癒やされた」とあります。「一人ひとりに手を置いて」、その病気を治してあげ、声をかけ、励まされました。私たちを群衆の中の一人として扱うのではなく、どんな人をも、一人ひとりを大切な存在として扱ってくださるイエスの愛が伝わってきます。

また、ルカ5:12-13には、全身をツアラアトに冒された人が登場します。ツアラアトは、以前は「らい」と訳されていましたが、重い皮膚病のことです。イエスが「手を伸ばして彼にさわった」ことが書かれています。ツアラアトは、当時、不治の病で、汚れたものとみなされていました。ツアラアトの人は、人里離れたところに隔離され、一般の人との接触が禁じられていました。物乞いをするときも、長いひしやくのようなものを差し出して、そこに食べ物などを入れてもらつたのです。ところが、この人は、大胆にも、イエスの前に姿を現し、きよめを願いました。彼は、イエスがツアラアトをきよめができるることを、どのようにして知ったのでしょうか。この人は、町の人々と一緒にイエスの教えを聞くことも、イエスが多くの人を癒やされるのを見ることもありませんでした。人々の口から口へと伝わるイエスの評判を耳にしただけだったのです。わずかな知

識でも、真剣に救いを求める者には、イエスがどのようなお方であるかが分かるのです。しかし、そんな聞きかじりものなど、あてにならない信仰なのでは…と思われるかもしませんが、そうではありませんでした。彼もまたユダヤの人、「律法の子」でした。幼いころから律法を教えられ、預言者の書の朗読を聞いて学んできたのです。それで、イエスのこと伝え聞いたとき、それが聖書の知識に結びつき、イエスが律法と預言者が指し示している救い主であることが分かったのです。

このツアラアトの人は、イエスの前にひれ伏して「主よ、お心一つで私をきよくすることがおできになります」と言いました。「主よ」という呼びかけ、また、「ひれ伏して」願う態度、そして、「お心一つで私をきよくすることがおできになります」との言葉は、この人の信仰を示しています。この人は、イエスにきよめる力があると信じただけでなく、イエスが、今、自分をツアラアトからきよめてくださると信じたのです。

“Faith is not believing that God can. It is knowing that He will.”（信仰とは、神がおできになると信じるだけでなく、神がしてくださると知ることである）といった言葉がありますが、この人の信仰をよく言い表していると思います。

イエスは、ツアラアトの人に「手を伸ばしさわった」のですが、足元にひれ伏している彼にさわるには、腰をかがめる必要がありました。イエスはひれ伏しているツアラアトの人の手をとって、この人を立たせながら、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われのです。私たちが神の前にへりくだるなら、神もまた、私たちに近づいてくださるのです。実際、イエスは、聖なる、いと高きお方なのに、人々が汚れたものだと言って避けて通ったツアラアトの人のところにまで降りてこられ、その人

を抱きかかえるようにして、癒やし、きよめてくださいました。

イエスはこの人に「わたしの心だ」と言われました。病気が癒やされ、人が健康でいることは、神のみこころです。ヨハネの手紙第三には「愛する者よ。あなたのたましいが幸いを得ているように、あなたがすべての点で幸いを得、また健康であるように祈ります」（2節）とあります。ですから私たちは自分でも健康に気をつけ、また、病気になったときには、医者や薬の助けが必要ですが、それだけでなく、私たちが癒やされ、健康でいることを願っておられる神に回復を祈り、願う必要があるのです。

## 二、癒やしと赦し

イエスは「癒やし主」、「癒やしの神」です。そして、その癒やしは、からだの癒やしだけにとどまりません。それは、私たちを罪という死に至る病いから救うものでした。

イエスが、ある家で人々を教えておられたとき、その家の天井から、寝たきりの病人がベッドごと、イエスの目の前に吊り下ろされました。当時の家の屋根は材木を渡して、そこにかやなどを乗せただけの簡単なものでした。しかも、どの家にも屋上に登る階段が家の外壁にありましたので、そんなことができたのでしょう。そのときイエスは、その病人に、「友よ、あなたの罪は赦された」（ルカ5:20）と言われました。イエスはこの病人を治す前に、この人に「罪の赦し」を与えられました。それは、病気であろうが、なかろうが、私たちの最大の問題が罪のために神との交わりを失っていることだからです。この人は自分では何一つできなくなって、はじめて神以外の何にも頼

れないことに気付いたのでしょうか。そして、聖なる神に近づくことができるために、罪の赦しを切実に願い求めたのです。イエスはその心を知って、この人に、まず、罪の赦しを宣言されたのです。

ところが、そこにいた律法学者やパリサイ人たちは、心の中でこう言いました。「神への冒瀆を口にするこの人は、いったい何者だ。神おひとりのほかに、だれが罪を赦すことができるだろうか。」（ルカ5:21）彼らは、イエスから学ぶためにそこにいたのではなく、イエスを批判するため、イエスのあとをつけまわしていたのです。イエスはそんな人たちの心の中を見抜き、「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために」と言って、寝たきりの病人に、「あなたに言う。起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい」と命じました。この人は、他の人にベッドごと担がれて、やっとイエスのところに來たのです。その人が起き上がり、ベッドを担いで家に歸れるはずがありません。しかし、イエスの言葉には力があります。この人はたちまち立ち上がり、自分のベッドを担いで家に帰って行きました（ルカ5:24-25）。

このことは、イエスの「癒やし」は、からだの癒やし以上のたましいの癒やし、つまり、罪の赦しを指し示し、イエスこそ私たちに罪の赦しを与えるまことの救い主であることを教えています。

イエスは、ただ病気の癒やしのためだけに世に来られたではありません。病気をとりまくあらゆるもの癒やしのために世に来られました。病気の治療は、車の修理のように、からだを修理すれば、それでよいというものではありません。病気の苦しみ、つらさは、からだの痛みだけではないからです。病気

のために仕事を失い、収入がなくなる、ときには治療費で借金を作ってしまうなどの経済的な痛みが伴います。また、家族に迷惑をかけているという心の痛みも生じます。それに、病気になって思い煩ったり、失望したり、不平不満が増え、周りの人々や神に対して罪を犯してしまうこともあります。病気の癒やしには、経済的、社会的なもの、また、なによりも、精神的、靈的なものを含んだ全体的な癒やしが必要です。

今日の医療では、こうしたトータルな病気の治療が心がけられており、アメリカでは大きな病院にはチャプレンがいて信仰的な面から人々をサポートし、セルフヘルプのプログラムなども用意されています。医療関係者は、ある意味で、イエスの癒やしを引き継ごうとして働いており、神はこうした人々を私たちの癒やしのために用いておられるのですが、完全な癒やしを与えてくださるのは、イエスの他ありません。

聖書はこう言っています。「キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。あなたがたは羊のようにさまよっていた。しかし今や、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰った。」（ペテロ第一 2:24-25）このペテロの手紙の言葉は、イザヤ書からの引用で、詩の形で書かれています。おそらく初代教会の礼拝で賛美歌として歌われていたのだろうと思います。私たちが、レントやイースターの期間にかぎらず、いつも十字架の贊美を歌うように、初代教会でも、いつもイエスの十字架が歌われたのでしょう。イエスは私たちのたましいの傷を癒やすために、あの十字架で、傷を受けてくださいました。「傷を受けられたお方が私たちを癒やすお方。」それは、まったくの

逆説です。しかし、それは真理です。かけがえのない真理、私たちを生かす真理です。

### 三、癒やしの完成

イエスは「癒やし主」、「癒やしの神」です。しかし、すべての人が地上で癒やされるわけではありません。自分でも懸命に祈り、多くの人々に祈ってもらったのに、癒やしが与えられない、与えられなかつたということもあります。使徒パウロにも病気がありました。パウロはそれが癒やされるよう懸命に祈りました。しかし、癒やされませんでした。その時、神は、パウロに「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」（コリント第二 12:9）と言わされました。神は、パウロに「弱さ」を残し、その「弱さ」を通して、ご自分の「力」を現そうとされたのです。パウロと同じように懸命に癒やしを願つたけれども、癒やされず、からだに障がいが残つた人がいましたが、その人はこう言いました。「障がいは不便です。でも、私は不幸ではありません。」神は、癒やしによって私たちの人生に幸いを与えてくださいますが、癒やされない場合でも、私たちから幸福が取り去されることはありません。最終的には神の栄光となり、私たちの祝福になるようにしてくださるのです。

そして、イエスが再び来られるときには、すべてのものが癒やされます。聖書はこう言っています。「すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下つて来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして

私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」（テサロニケ第一 4:16-17）キリストにある者、信仰によってイエスと結びあわされた者はすべて、よみがえります。その復活のからだは栄光のからだで、病気も、障がいも、どんな欠陥も、弱さもない、完全なもの、決して再び死ぬこと、滅びることのないものです。新しい天と新しい地、神の都には「もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない」（黙示録 21:4）からです。

神は癒やしの神。その癒やしは神の愛とあわれみから生まれたもので、イエスの十字架から来るものです。たとえ地上で癒やされることができなかつたとしても、天ではすべてが癒やされます。癒やしの神を信じる私たちは、この希望によって、日々を健やかに、穏やかに生きるのです。心であれ、からだであれ、弱さを覚え、痛みを感じるとき、癒やし主である神に、心を向けましょう。

### （祈り）

父なる神さま、今日、人々は、からだばかりでなく、そのたましいも、ひどく病んでいます。社会も、もう回復できないのではと思われるほどです。しかし、癒やし主であるあなたにできないことはありません。人々が、あなたが送ってくださった癒やし主イエス・キリストを信じ、その癒やしの恵みと力を受け取ることができますよう導いてください。私たちも、やがて、完全な癒やしの日が来ることを信じ、希望を失わずに、世界の癒やしのため祈り続けることができますよう助けてください。主イエスのお名前で祈ります。